

# 画家の手紙や作品を通し 画家が生きた環境との 関係を明らかにしていく

Navigator

文学部/フランス語文学文化専攻

## 阿部 成樹 教授

Shigeki Abe

阿部 成樹 (あべしげき)

1962年7月28日、京都市生まれ。下関、広島、金沢に住む。東北大学文学部(美学・西洋美術史専攻)卒業。同大学院の博士課程在籍時にパリ大学留学(1989-93)。美術史学博士号取得。山形大学教授などを経て、2011年より現職。

### 現実と非現実が混在した 作品の背景を分析する

はるか彼方の時代を生きた画家が、どんな影響で絵を描き、独自の世界を創りあげたのか。阿部先生は、残された当時の手紙や作品から巧みに推測し、画家の人生に迫っていく。先生に、その方法論から訊いた。

「私が研究する18世紀から19世紀にかけては、現在のメールのような役割を手紙が果たしていて、同じ市内に住む同士でもやり取りが行われました。現地の図書館に当時の手紙の多くが残っているので、作品の批判も含めて気になる記述をカードにメモして整理し分析する作業が基本となります。」

もう一つの方法では、他の画家たちと作品同士を比較したりアッサンを分析するなどして、類似点があればその発想の元になった経緯を探していきます。」

阿部先生が専門に研究するのは、19世紀に活躍したフランス人画家、ドミニク・アングルだ。

「この画家は、写実的な部分とデフォルメされた部分の一つの作品に共存する点が興味深いです。また、影が少なく平面的ともいわれます。」

例えば代表作の一つに『横たわるオダリスク』がありますが、こちら側に向けられた背骨を現実よりも長い曲線で描くことで女性の美しさを表現しています。一方で布地の質感などは写実的に細かく描かれていま

す。また、背中全体に光が当たって影が少なく奥行はそれほどありません。

また『第一執政官ナポレオン・ボナパルト』は、着ている服などの質感が繊細に表現されていて、毛足の触感までが伝わるほどです。しかし、その顔はこの世のものとは思えないほど理想的に描かれています。またナポレオンが立つ床はまるで急坂のように不思議な見え方をしています。こうした非現実と現実の落差、あるいは曖昧な感覚がアングルの作品には漂っています。」

### 多様な人間関係のなかで 画風に影響を与えた要素を探す

それでは、アングルに見られるこうした特長は、どこから生まれたのだろうか。それは阿部先生独自の研究方法で明かになる。

「様々な考え方が成り立ちます。理想を目指すためにデフォルメされた描き方には、当時流行していた線だけで描く版画の影響が見られます。例えば馬を描く場合も輪郭が強調され骨格などは分かりませんし、輪郭がきれいなら4本の足など何がどこから出てきても問題視しない傾向がありました。」

また、理想的な人体表現で彫刻をつくる古代ギリシャの技術に学んだ新古典主義の特長を受けて、現実の人体にはあり得ない石けんのように真っ白で毛穴もシワもない描写を生み出したと推測されます。さらに、

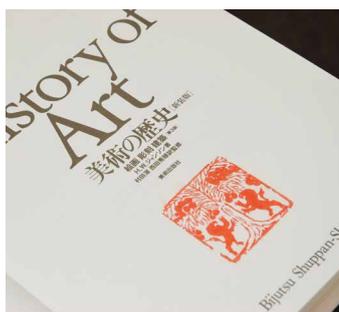
写実的な特長は、絵画の師で高度な写真描写を得意としたジャック＝ルイ・ダヴィッドの影響とみられます。

アングルは一時期、修道院でこのダヴィッドの弟子たちと一緒に創作活動を行っていました。そのなかに過激に平坦な絵を描かせた人たちがいたり、ナポレオンを描いた弟子もいましたが、アングルはそこで取捨選択しながら作品に取り入れていたと考えられます。」

そのダヴィッドの弟子たちのなかで特に重要な役割を果たしたのはフランソワ・ジェラールだという。

「新古典主義の代表的な画家で、肖像画で評価されていました。この人とアングルの関係が良好だったことが手紙から分かります。そして、それまでの西洋絵画の技法を破った作品が批評家から批判されていたアングルを、ジェラールは積極的に評価していました。」

このように単に資料とアングルを結びつけるのではなく、様々な人がいる環境のなかで作品の変遷を考えるのが阿部先生の研究方法だ。



ゼミの「通史班」が購読する「美術の歴史」。全員にとってのテキストだ。

**美術の概念が広がる現代から  
美術史研究を見直す**

阿部先生のこうした研究手法は、単に絵の参考にした古代の作品を探す旧来の研究とは一線を画す独自の研究手法だが、先生にはもう一つオリジナルな研究分野がある。それが、美術史研究の見直しだ。

「現代は、例えば液体が美術作品になったり、博物館に行くような展示物が美術館で展示されたり、『美術』の概念が広がっています。ニューヨークのメトロポリタン美術館では（固有の民族に伝承された）民族美術が普通に展示されていますから、ジャンルだけでなく世界の様々な地域や文化も対象となり、さらに範囲が広がっています。人間の制作物は多岐にわたりますから。」

これに対して美術史研究は、20世紀半ばからいわゆる名作で構成された西洋美術史を中心として発展してきました。ただ、20世紀初めに美術史研究が確立されたときは、美術に対する考え方もっと広げて、様々な民族が作りだしたものを包含し得るような視野をもっていた人々がいたのです。したがってその頃の研究を改めて追跡してみたい思いがあります。

そこで、これからアンリ・フォシヨンの研究を通して、美術史研究の考え方を直視し、今までよりもより幅のある学問へと脱皮させたいと考えています。フォシヨンは、美術は鑑賞されるものという考え方が成り

立つ以前の「中世美術を研究しつつ、一方で葛飾北斎や仏教美術の本も著しており、手がける世界がきわめて幅広い美術史家でした」

先生の美術史への視線は、有名画家という範疇を越えて、そして西洋美術を越えて広がっていく。

**グループ別の研究が、  
様々な能力を育てていく**

阿部先生のゼミは、テーマ別に2つのグループに分かれる。大学の美術史研究はイタリアルネサンスが比較的多く、フランス美術史の研究ができるのは希少価値だ。

「『通史班』と『見学班』のグループに分かれますが、『通史班』は『美術の歴史』という古代世界から20世紀の美術までがまとめられた本を毎年、半分に区切って1年間で手分けして講読します。前半の場合は、中世美術までを5回に分け、それを貫くテーマを学生が設定して話の流れをつくりながらレクチャーします。こうしたスタイルにより、講読しない『見学班』の学生もおよその美術史の流



ゼミはグループ活動が基本。それがコミュニケーション能力を育てる。

れが分かります。一方『見学班』は、後期に美術館見学を3回行います。これも昨年の『美術館建築』などのように、全てを貫くテーマを学生が設定し、実際に見学した結果をまとめていきます」

このようにグループで活動するスタイルに、先生はどんな目標を設けているのだろうか。

「学生が自ら考え行動できる姿勢と能力を身につけることを目指しています。座学だけでなくレクチャーや美術館見学などの課題を一つひとつ協力してクリアしていくプログラムを作っています。」

学生たちの美術への関心はもともと高いのですが、レクチャーや見学において自ら企画立案から作り上げる過程で、自身の関心をさらに追求し高めています。そのなかで受身ではなく自ら考える姿勢を育てられたらと思っています。また、班を作ってゼミを進めることで、単なるプレゼンテーション能力ではなく、相手の考えを理解し発展させるコミュニケーション能力を身につけてほしいと思っています」

阿部先生は「単なる画学生のアンクルが、どんな試行錯誤を経て独自の個性をもつ画家・アンクルに成長したかを検証することは、私たち自身の人格形成と重なる部分がある」と研究の魅力を語る。

それは、皆さん自身が阿部先生のもとで美術史を学び、成長していく姿と重なる。



**現在の研究テーマを教えてください**

- ・アンリ・フォシヨン (1881-1944) の美術史学と同時代の学問 (歴史学、社会学、人類学、生物学など) との関連。
- ・画家のドミニク・アングル (1780-1867) を中心とするフランス新古典主義美術 (フランス革命の頃から19世紀前半までの美術)。

**ご趣味は?**

特に趣味はないのですが、美術展や各地の観光キャンペーンのポスターで気に入ったものがあれば取り寄せて飾っています。

**どんな高校生でしたか?**

高校生活は楽しかったのですが、私自身は地味な高校生だったと思います。

**高校生の頃の夢は?**

美学・西洋美術史が学べる大学への進学を考え

ていましたが、卒業後の目標はありませんでした。遠くの目標を目指さず、目の前の選択肢を選んで進むのが私には合うようです。

**お勧め美術館**

- ・国立西洋美術館  
日本を代表する西洋美術の美術館。中世から20世紀までおもだった作家の作品が常設展 (高校生は入場無料!) に並んでいて、この先これに勝てるコレクションをもつ美術館は決してできないでしょう。目にとまった作品をじっくり眺める楽しみにひたるには、一番向いています。例えばドラクロワ『聖母の教育』(1853年) をじっと1分間眺めると、急に背景の森の深さが息を吹き返したように甦る、驚きの体験ができますよ。  
<http://www.nmwa.go.jp/jp/index.html>
- ・金沢21世紀美術館  
全国的にも知られた元気な美術館。「美術」ってこれでもいいのか、ムズカシくない、という解放感に浸れます。遊園地のように楽しく、講演会のように有益なお勧めの館。  
<http://www.kanazawa21.jp/>
- ・京都 細見美術館  
日本美術や工芸が中心ですが、建物はモダンで個性的な私立美術館。公立の施設では出にくい「個性」がムンムン漂う館で、あなたの美術館イメージの更新を。  
<http://www.emuseum.or.jp/>

- ・ロンドン大学附属コートールド研究所ギャラリー  
堅苦しい名称ですが、美術館です。ゴッホやゴーガン、セザンヌなど主に近代絵画の名作が揃っていますが、なんとと言ってもお勧めは、マネの大作『フォーリー・ベルジュールのバー』です。炸裂する火花のような筆さばきで描き出された、近代都市のかりそめの人工楽園。絵を見て口がきけなくなる、というまれな体験ができる作品です。  
<http://www.courtauld.ac.uk/gallery/collections/paintings/impostimp/manet/folesbergere/index.shtml>

**先生にとっての「特別な一冊」は?**

しいて上げれば、プラトン『パイドロス』(岩波文庫) でしょうか。人の心が美に否応なく引きつけられるさまを、理性を越えた恋愛に譬えて美しく表現した哲学書です。留学先にも持っていました。

**高校生へメッセージ**

自分の関心を追求するのはいいことですが、目と心を開いて未知の何かと出会う姿勢も大切だと思います。大学では、それまで知らなかった世界と出会い、新たな自分を発見してほしいと思います。

昔のフランス人画家の手紙の言葉が現代に甦るかのよう。



ゼミの「見学班」は自ら計画を立て美術館へ。